

萱

2019·8

風萱集

木村 嘉男

水無月のけふそこぬけに晴れにけり
懐郷に病んで一日を五月雨るる
黒南風や冥みも深き平林寺
合歡咲くか高島茂の忌ぞちかみ
軍港蔵す馬が灯を提げ海霧へ消ゆ

亀田虎童子

朝風を乱さぬ 一步 一步 かな
手足などどうでもよくて葱坊主
揚羽蝶 令和の風を乱さずに
売れさうで売れなささうで夏蜜柑
サングラス 老人の顔 緊りたる

出牛 進

夏の雨止まぬと見しが夕日影
薔薇園の薔薇カタカナの名に咲けり
青葦や葉擦れの音の渦を巻く
さつき散る薬の長きを残したる
三つ 四つ 鳴いて 一拍 四十雀

松下 道臣

凍てもどり奥歯カチカチ鳴らしたる
初蝶の手品のやうにあらはるる
誓子の忌遠くの星に手をかざす
花むしろ紙のコツプに紙の皿
痩せるつぼせつせと圧せる四月馬鹿

小島 良子

かまきりに振り向かれたる我が齡
鶏卵の中の空気や梅雨に入る
ゆつくりと動く断層草いきれ
富士塚の溶岩尖り梅雨に入る
父の日や五體字鑑の重たくて

萱集

進選

梅雨入やお喋りに行く美容院
東京 飯塚トシ子

水影に雲間の日差し末草
山法師一息入れて折り返す

鈴木記念館

夏の雲間取り昭和の我が家かな
床の間にデジタル時計風薫る

ひと葉打つ音に始まる梅雨入かな
東京 武川 未有

京マチ子逝く青葉に閉づる羅生門
水撒きのしづく校庭リレー待つ
濃く淡く螢の闇の半世界
熟れ麦の風にペダルを運ばせて

アマリス長き石段見あげをり
埼玉 鈴木 愛子

青梅雨やガンジー像の脛細し
菰の花猫低うして通り抜く
山すそを二輛電車や桜桃忌
梅雨の月河口に近き街灯り

蚊遣火に酔ひまどろみの甲夜かな
ひとしきり螢の揺れて消えにけり
石段の手すりに体み若葉風
ちよこちよこと園児の列の夏帽子
東京 野村 宏

葉漏れ日に故山の気配青葉闇

東京 ふなかわのりひと

行く春や母の間ひあげ讚仏偈
万葉の故地なる故郷あいの風
老鶯や二上山を幾世代
夏立つや清き磯みの雨晴
旅装解き一日遅れの菖蒲風呂

千葉 光成 敏子

山焼きを終へ山水のうまきこと
どの家も巢燕のゐて夜の静か
お狩場の窓を覗けば姫女苑
暮れてすぐ蛙鳴き出す水の郷
鉄の戸の内なる蔵書桜桃忌

父の日や戸棚に眠る古時計
千葉 中山 恵子

紫陽花や窓開けておく勝手口
膝に乗る猫の重さや梅雨深し
居るはずの無い母の声沙羅の花
コクトーもラディゲも青春ソーダ水